

釈尊の人生哲学

田 路 慧

釈尊とは釈迦牟尼世尊（釈迦族出身の聖者）の略で、本名はゴータマ・シッダルタという。釈尊は紀元前五―四世紀頃、インド古代社会の大変動期に今のネパールに釈迦族の王子として生まれた。一六才で結婚し一子をもうけたが、二九才で出家、三五才で成道、以後八〇才の入滅にいたるまで、民衆の教化救済につくし「人類の最大の教師」と呼ばれ、人々の深い尊敬をうけた。その教えは仏陀（覚者）の教えとして後世に伝えられ、今なお世界の人々の心をとらえ導き続けている。

求道の動機 「若い頃の私は身体が弱かったが、きわめてめぐまれた幸福な生活をしてきた。宮殿には蓮池があり、赤や白の蓮の花が咲きほこっていた。部屋にはいつも梅檀香のかぐわしい香がただよい、衣服もカーシー産の最上のものであった。外出するときはいつも白い傘蓋がかざされていた。私のために冬と夏と雨季のための三つの宮殿があった。雨季には女だけの伎楽にとりかこまれて過し、宮殿から一歩も外に出なかつた。

私はこのような生活のなかにあつて思った。愚かな者は自ら老い、病み、死ぬものでありながら、他人が老い、病み、死ぬのを見て厭い、忌み嫌う。私もまた老い、病み、死ぬことを免れぬ身である。しかるに他人の老い、病み、死にいくさまを見て、厭い忌み嫌っている。このことは私にはふさわしくない。このように考えたとき、私の青春の心のおこりは消え去ってしまった。」（増支部経典三、三八柔軟、抄記）

「スパッダよ。私は二十九才で、善なるものを求めて出家した。スパッダよ。私は出家してから五十年余となった。そして正理と法の領域のみを歩んできた。」（大般涅槃経）

このように釈尊は自己の人生苦の克服をめざし、善なるもの（さとり）涅槃（至福）を求めて出家し、修行して、仏陀（覚者）となったのである。

仏教とは「もろもろの悪をなさず、善を行い、自己の心を浄む。これが覚者たちの教えである。」（法句経・一八三偈）

悪をなさず善を行うということはすべての道徳説の説くところである。したがって仏教の特色は廃悪修善の根柢として「自己の心を浄む」ということを掲げたところにあると言ふことができよう。

ではなぜ釈尊は自心浄化をもって仏教の根本としたのであろうか。

「ものごとはすべて意を先とし、意を主とし、意より成る。人、もし、汚れた意にて語り、あるいは行えば、苦の彼に従ふこと、車輪がそれを引くものに従うがごとし。」

「ものごとはすべて意を先とし、意を主とし、意より成る。人、もし浄き意にて語り、あるいは行えば、楽の彼に従ふこと、影の形を離れざるがごとし。」（同一、二偈）

人間は環境に支配されるとともに、環境に意味と価値を与え、支配し変革し、創造することのできる自由意志をもった存在である。自己と自己の関わる世界は自己の意によって成り立ち支配されるとするのが仏教の基本的な考え方である。したがって与えられた自己とその環境をどうするかは自己の意のあり方によるのである。自己の人生の苦楽、不幸も自己の意の浄、不浄により、その浄不浄も自己の意如何にかかっているのである。

「自ら悪をなして自ら汚れ、自ら悪をなさずして自ら浄む。浄、不浄は自己に帰す。人は他によって浄められることはできない。」（同一六五偈）

自己の人生苦を克服しようるのは自己のみである。自己の人生の全責任は自己自身にある。他に期待する甘えをこそまず捨てるべきである。釈尊はなによりもまず生きることのきびしさの自覚を促し、このきびしさに耐えうる自己形成の道を説くのである。

自心浄化の道 「すべては苦である。（一切皆苦）と智慧によって知るとき、その時、人は苦を離脱す。これが浄に至る道である。」（法句経二七八偈）

苦 dukkha は「思うようにならない」という語義をもち、現実の矛盾から生ずる不安や苦悩を意味する。智慧とは現実のあるがままの認識を意味する。智

慧により人生の不安と苦悩の現実を冷静に直視し、幻想を捨てること、苦を克服する第一歩である。

では、なぜ人生は不安と苦悩に満ちているのであろうか。

「『すべてのものは無常である。』(『道行無常』)と、智慧によって知るとき、その時人は苦を離脱す。これが浄に至る道である。」(同二七七偈)

無常とは生滅変化のことである。すべてのものは変化を免れず、生滅しながら存続していくのである。これが世界の真相である。仏教では特に自己自身の無常が強調される。

「牧人が棒で牛を牧場に追いたるように、老と死は生けるものの命を駆り立てる。」

(同二三五偈)

「自分の子らや財産におぼれ執着する人を、死は捕え去る。あたかも洪水が眠れる村を流し去るように。」(同二八七偈)

しかるに、われわれは自己が永遠不滅であるかのように思いこんだり、自己と自己の執着するものの常恒不変なることを求めてやまない。ここに不安や苦悩の最大の源があるのである。

されば無常の自見こそ苦を克服し、心を浄める道なのである。

「この身は水泡のごとしと知り、かげろうのごとしと深く自見している人は、悪魔の甘い誘いを退ぞけ、死王に出合うことはないであろう。」(同四六偈)

自己と自己の関わるすべてのものが無常であるならば、「我がもの」と執着し、永遠に所有しようもの何もなく、執着する主である「我」そのものも絶対的ではなく、不変不滅の本質(実体)のようなものではない。

しかるに、われわれはこの道理に眼をそむけ、自己を絶対化し、その無制約性を求めてやまず、万事自己の思うままならんことを願う。かくして自分さえ、自分だけはと自己を特別視し、うぬぼれと利己主義は増長し、思うようにならないという苦悩といら。だちは増大するのである。

「『これは自分の子らである。』『これは自分の財産である。』と、凡人はあくせくと思いい煩っている。自分さえ自分のものではない。どうして子らが自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。」(同六二偈)

「出家にも在家にも『これは私かしたのだ』と思わせようと思ひ、なすべきこととなすべからざるこのなんであれ『まさに自分の思いのままになるべきだ。』と考えるのは愚かものなすところ、彼の欲望と高慢は増大するのである。」(同七四偈)

かくて自己の我の実相を自覚することが苦を克服し浄に達する道となるのである。

「『すべてのものは無我である。』(『證法無我』)と、智慧によって知るとき、その時人は苦を離脱す。これが浄に至る道である。」(同二七九偈)

縁起の法 ところでどうして物事は無常無我なのであろうか。その存在論的説明が「縁起の法」の理論である。

「まこと熱意をこめて思惟する聖者に、かの方法が明らかとなったとき、彼の疑惑はことごとく消え去った。縁起の法を悟ったからである。」(小部經典、一、一自説經)

まさに積尊はこの「縁起の法」を悟って仏陀になったのである。仏教の理論と実践はすべてこの「縁起の法」に基づいて成り立っているのである。

「修行者たちよ。縁起とはどのようなことであらうか。たとえば、生があるから老死があるという。このことは、私がこの世に出ようと出まいと、きまつていることである。

法として定まり、確立していることである。その内容は相依性である。それを私は悟った。悟って、今、汝らに教え示し、説明して、『汝らも見よ。』と言っているのである。」(相応部經典二二二〇縁)

このように縁起は物事の条件による生起を意味し、すべての存在は相依性(因果性)をもち、相互依存関係にあることを表わす。それは存在のあり方を規定している真理であるから「縁起の法」と呼ばれるのである。

この世界のすべての物事は縁起によって、すなわち種々様々の条件の複合によって生起し、条件の変化によって生滅変化運動しながら存続するものであって、なんらそれ自体としての孤立性、固定性、永遠性、絶対性をもたず、したがって無常にして無我なのである。

「縁起の法」は次のような公式をもって表わされている。

「これあるに縁りてかれあり、これ生ずるに縁りてかれ生ず。」

「これなきに縁りてかれなく、これ滅するに縁りてかれ滅す。」(相應部經典 十カ)

「何があるによりて老死(苦惱)があるのだろうか。何によりて老死が生ずるのであるか。」(同)

こうして釈尊は一切の苦惱の根源は「無明」であり、「無明」を打破することが苦悩を克服する道であると悟ったのである。

「どのような苦しみも、すべて無明によって生ずるのである。」「しかしながら、無明を残りに離れ、止滅するならば、苦しみの生ずることはない。」(雜集、小品一、二)

「無明 avidya」とは、不如実智見とも訳されるように、物事の実相があるがまに見ないこと、すなわち無常無我の道理、縁起の法に無知、無自覚なることである。この根本的な無知から、邪見、邪思惟、邪念、邪欲が生じ、そこから一切の迷いと苦悩が生ずるのである。まさにこの「無明」こそ最大の心の汚れなのである。

「無明は、これら汚れのなかの汚れ、最大の汚れなり。修行者たちよ。この汚れを絶ちて、汚れなき者となれ。」(法句經 二四三偈)

このように「心を淨む」とは、無常無我の道理、縁起の法を体得し、その智慧によって無明の汚れを除き、苦を滅し、安らぎをうることにほかならないのである。

すべてのものは縁起によって生起するのであるから、苦悩の現実もまた条件によって生じたものであり、無常無我であって絶対不変のものではない。したがって苦悩の縁りて起る条件を解明し、その条件を取り除くか、そういう条件を作らないようにするならば、苦悩を克服することができるのである。たとえ苦悩そのものはなくならなくても、その原因がわかり解決の道がひらけると、われわれは苦悩にとらわれることなく、またよく耐えながら冷静に問題に対処することができるのである。苦悩の現実をいたずらに固定し絶対化して、その真相を見きわめようとせず、ただ逃れようとしてあかくとこ

ろに問題があるのである。

無常無我の道理は人生の苦悩と悲哀の源であるとともに、人生の生きがいと至福の源でもあるのである。すべてが無常無我なればこそ、努力することに意義があり、成長や発展、創造や改革も可能となり、理想や希望ももつことができるのである。

かくして、無常無我の道理、物事の「生と滅」を解き明かす「縁起の法」の自覚体得が究極の課題となる。

「たとえ百才まで生きたとも、『生と滅』を見れば、一日生きて『生と滅』を見るにしかず。」(法句經 一一三偈)

縁起の法を悟り、その智慧によって無明の汚れを残りに洗い浄め、一切の苦悩を離脱した安らぎと喜びの境地を、釈尊は「涅槃」と呼び、人生の最高の理想としたのである。仏陀とはまさに「涅槃」の体得者のことなのである。

「仏陀の教えを信する修行者は、歓喜に満ちて、心静まり、変動することなき至福の境地に至るであろう(涅槃寂靜)。」(同三八二偈)

以上述べた一切皆苦、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の四つの命題は「四法印(四つの仏教の標識)」と呼ばれている。

四諦(四つの真理) 四諦の教えは四法印や縁起の理論を日常生活に適用し、人生問題に対処するための実践の道を示すもので、釈尊の最初の説法で説かれたと言われている。

「人々は恐怖にかられて、山や森や樹や祠など、多くのものを依り所とするけれども、それらは安心できる依り所ではなく、最上の依り所ではない。こうした依り所によっても、あらゆる苦悩から離脱することはできない。」

仏陀と法と僧伽とを依り所とし、四つの聖なる真理、すなわち苦と、苦の起と、苦の滅と、苦滅に至る八支の聖なる道を、正慧をもつて観するならば、これこそ安心しうる依り所であり、最上の依り所である。この依り所によれば、あらゆる苦悩から離脱することができる。」(法句經 一八八—一九二偈)

釈尊は合理的に苦悩に対処することを説き迷信を徹底的に否定する。自然への逃避や、迷信呪術は人生苦の眞の解決には役立たない。仏陀(覚者)と

その法（真理の教え）と僧伽（教えのもとに和合団結した仲間たち）の三宝と、四つの聖なる真理こそ、人生苦の眞の解決に役立ち、眞に依り所となしうるものなのである。

四諦の第一の「苦」は、直面する苦の現実があるがままに認識すべきことを示すものである。第二の「苦の起（集）」は、苦の生起した条件を探究すべきことを示し、一切の苦悩は無明に基づく激しい盲目的欲望（渴愛、妄執、貪欲）から生起するものであることを示す。第三の「苦の滅」は、めざすべき理想の状態を明らかにすべきこと、すなわち涅槃を理想となすべきことを示す。第四の「苦滅に至る八支の聖なる道」は、苦を滅し涅槃を得るための具体的な実践の方法を示すものである。

「修行者たちよ。正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定という、この八つの部分からなる聖なる道こそ、苦の滅に導く道に関する聖なる真理である。」
（相垢部経典 転法輪経）

八聖道の第一の正見は、正しいものの見方をなすべきこと、すなわち無常無我、縁起の道理に基づいて物事を認識すべきことを表わし、第二の正思は正しい思考、すなわち道理に基づいて思考すべきことを示す。第三の正語は正しいことば、すなわち正見正思に基づく正しい表現をなすべきことを示す。第四の正業は、正しい行為、すなわち正見正思に基づく正しい行為をなすべきことを示し、第五の生命は、正しい生活、すなわち正見正思に基づき正語正業を実践して正しい規律ある日常生活をなすべきこと、また正しい職業により生計を保つべきことを示す。第六の正精進は、正しい努力、すなわち以上の目標を旨として努力精励すべきことを示す。第七の正念は、正しい専念、すなわち不断に正見を念じ専心すべきことを示す。第八の正定は、正しい精神統一、すなわち常に心を定め、統一し、正見に集中すべきことを示すのである。正念と正定は相即して正見の土台となり、正見が正念と正定へと心を導くのである。釈尊は念をこらし心を定めて、すなわち正念と正定を完成して正見し智慧を得たのである。

「智慧なき人に心の統一と安定はなく、心が統一し安定していない人に智慧はない。心が集中安定し智慧をそなえた人は、すでに涅槃に近い。」（法句経三七二偈）

釈尊は八聖道は快樂主義と禁欲主義の両極端を排した中道であり、だれでも実践でき、しかも確実に智慧と涅槃に導く自心浄化の最高の道であると述べている。

「これこそ道である。他に智見を浄める道はない。汝らこれを実践せよ。これこそ悪魔を退ける道である。」（法句経二七四偈）

「汝ら、この道を実践せば、まさに苦を滅するであろう。私は、すでに毒矢の除滅することを知って、汝らにこの道を読くのである。」（同 一七五偈）

釈尊は八聖道を自ら実践し、確認したうえで「汝らも行え。」と説いているのである。釈尊の教えはすべて深い体験的思索から流れ出ているのである。

五 戒 八聖道の実践を支え、促すのが「戒」である。

「人、もし、生けるものを殺害し、嘘言を語り、世間において与えられないものを盗み他人の妻と交わり、穀酒や果実酒に耽けりおぼれるならば、それはこの世においてすでに自分の根を掘るものである。」（同二四六一二四七偈）

不殺害、不偷盜、不妄語、不邪淫、不飲酒の五戒をさらに発展させたものが、不飲酒を除き、不両舌、不悪口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見を加えた十善戒である。戒はよい習慣の語義をもつように、社会生活上身につけるべき道徳規範のことである。きびしい自律自省によるよい習慣の形成こそ自心浄化の道である。

「人、もし、戒をもたないならば、蔓草の茂るサーラ樹のように、自ら敵の欲するままにふるまう。」（同六一二偈）

「戒を具へ、不放逸に住す正慧解脱の人には、悪魔も寄りつくことができない。」（同五七偈）

不放逸 人生の理想とそこに至る道は明らかとなった。目的と手段を知りながら実践しないことほど愚かなことはない。ところがわれわれの心の中には努

力しないで甘い果を期待するずるい心があり、日先きの安逸を求め、気ままで怠惰な生活にのめりこんでいく根強い傾向がある。われわれの最大の敵はこの内なる放逸懈怠の心である。この放逸な心との闘いこそ急務である。

「修行者よ。心を定めよ。放逸になることなかれ。心を愛欲に住せされ。放逸に過して真赤に焼けた鉄丸を飲むことなかれ。焼かるる時になって『ああ、苦しい。』と叫ぶことなかれ。」(法句経三七一偈)

「不放逸は不死への道。放逸は死への道。不放逸の人は死なず、放逸の人は死せるに等し。明らかにこの理を知りて、よく放逸の心と闘う人々は、不放逸を喜び、聖者の境地を羨む。よく心を定め、よく忍耐し、常に努め励むこれら賢者たちは、最高に自由で幸福な涅槃に達する。」(同二二一三偈)

放逸で怠惰な生活には生の充実感はない。真剣に今のこの生を生きぬく時われわれは死を超越する。不放逸を喜び、努力することを楽しむ境地が涅槃なのである。「すべてのものはうつろいゆく、不放逸にして努力せよ。」(大般涅槃経)が釈尊の最後のことばであった。

自己の調御と確立 われわれは自己に執着し自己を絶対化する根強い傾向をもつとともに、自己ほど思うようにならず、頼りにならないものはないことも痛感しており、絶えず自己不信、自己嫌悪におち入り、不安と孤独にさいなまれている。せまりくる不安と苦悩は自己を見失なわせ、自己を放棄して他へと向わせる。人は絶対的権威を求め、依存し、その保護によって苦悩から逃れ安心しようとする。しかしすでに見たように自己の不安苦悩を克服しうるのは自己のみであった。自己の人生を生きるのは自己自身である。自己以外のものに自己の主や依り所を求め、それにすがろうとするところに根本的な問題があるのである。

「自己こそ自己の主である。他にいかなる主があるうか。自己をよく調御したならば、人は得たい主を得るのである。」(法句経一六〇偈)

「まことに、自己こそ自己の主であり、自己こそ自己の依り所である。だから自己を調御せよ。調教師が良馬を調教するように。」(同三八〇偈)

主の原語 *natta* は保護者、崇高な絶対者、本尊の意味をもっている。釈尊は自己こそ自己の主であり、本尊であるから、自己を尊敬し、自己に帰依せ

よと説き、人間の自由と尊厳を宣言する。仏教は徹底したヒューマニズムの立場に立つのである。

ところで目前の自己はどう見ても主となり、帰依の対象となるような自己ではない。とすれば自己の帰依すべき主たりうる自己の調御確立が人生の最大の課題となる。

「もし、人、自己の愛すべきことを知らば、自己をよく守らねばならない。心ある者は夜分の三分の一は且覚めて自省すべきである。」(同二五七偈)

「修行者よ。自ら自己を叱り、自ら自己を吟味せよ。こうして自己を守り、正念する者は安らかに生活するであろう。」(同三七九偈)

自己調御とは、自己を守り、自省し、きびしく自己を吟味して、自己を練磨し形成することである。そしてそれは自己に打ち勝ち、自己を統御支配することでもある。

「戦場において百方の敵に打ち勝つよりも、一人の自己に打ち勝つ者こそ、最高の勝利者である。」(同二〇三偈)

「他の人々に勝つよりも、自己に勝つ方がすぐれている。常に自己を従え、行うところ常に節度ある人の勝利には、神も鬼神も梵天も魔王も、反抗することはできない。」(同二〇四、二〇五偈)

きびしい自己調御、自己練磨により自己に打ち勝ち、自己の真の主となって自己を統御支配し、他への依頼心をことごとく打ちくだき、一切の束縛から解脱するとき、自主自律独立自尊の最高に自由な生き方が開けてくる。仏陀とはまさにかかる安心立命の自己の確立者であり、「自己に帰依する人」を言うのである。

かくて無我の教えは自己確立の教えとなって結実する。それは後世に「小我を捨て大我に生きる。」と表現されたように、小我の絶対化を打破し、我執我欲に打ち勝って、自己を相依相資の縁起的世界の中に、換言すれば、自然、人類、家族、国家社会等、自己をとりまく世界との関係の中に正しく位置づけ、その中で、それと共に自己の生を全うすることである。それは、また法(真理)を求め、法に導びかれ、法に支えられ、法と共に生きることでもある。法と一体となった自己(如来)こそ、真の自己の主であり、依り所なのである。

「自己を灯とし、自己を依り所として他を依り所となすことなかれ。法を灯とし、法を依り所として、他を依り所となすことなかれ。」(大般涅槃經)

このように積尊の遺教もまた自帰依、法帰依を説いたものであった。かくして自心浄化の道は自己の調御確立に帰するのである。

人間の平等 無常無我、縁起の道理によれば、すべての生けるものは仮りにそのような姿をとって現象したものにすぎず、そこにはなんら差別はない。したがって法(真理)の前ではすべての人間は全く平等である。伝統的な階級制度のもとで積尊は堂々と人間の尊厳と平等を宣言する。

「螺髻(バラモン階級の髪型)や家柄や生まれによってバラモンであるのではない。真実と理法を有する者は幸いである。彼こそ真のバラモンである。」(同三九三偈)

「怒りやすく恨みをいだき、邪悪にして他人の美徳を覆い、誤った見解をもち、たくらみのある人―かれこそ賤民であると知れ。」(釋集 賤民經)

「生まれによってバラモンなのではない。生まれによって賤民なのではない。行為によってバラモンなのである。行為によって賤民なのである。」(釋集 賤民經)

「生まれを問うなかれ。行いを問え。火は妻にあらゆる新から生ずる。賤しい家に生まれた者でも、聖者として道心堅固で、恥を知り、身を懐しむならば、高貴な人となる。」(釋集 スンダリカ・パーラドヴァージャ經)

積尊は人間としての倫理的实践に絶対的な価値をおき、それによる以外にいかなる差別も認めない。不当な差別や偏見こそ多くの苦悩や不幸を生むもとである。積尊はこの人間の尊厳と平等の真理を自己の教団において実現し社会に広めるべく努力したのであった。

慈 悲 無常無我の道理の体得はまた人を自他一如の境地に導く。すなわち他の喜びを我が喜びとし、他の苦悩を我が苦悩と感ずる共感の世界が開ける。積尊はこの心情を慈悲と呼び、人間が体得実践すべき最高の課題としてある。慈は純粹な友愛を表わし、悲は同悲同苦の心を示す。慈悲は単なる同情ではなく、積極的に生けるものの苦悩を除き(拔苦)、安らぎと幸いを与えようとする(与樂)実践的な心情である。涅槃の体得はこの喜びを生けるものすべてと共に味わわんという慈悲の實踐となって発露するのである。

「涅槃の境地に達してなすべきことは次のとおりである。」

「汚れた行為をなして識者の非難をうくることなかれ。ただ、かかる慈しみをのみ修すべし。生きとし生けるものの上に、幸いあれ、平和あれ、恵み多かれと。」

「あたかも母がそのひとり子をおのが生命をかけて守ることく、すべての生きとし生けるものの上に、限りなき慈しみの思いをそそげ。」

「立つにも、行くにも、坐すにも、臥するにも、いやしくも眠りてあらざるかぎり、力をつくしてこの慈しみの思いを抱くべし。これが聖なる境地である。」(釋集、慈經)

慈悲心は生命への畏敬の念に根ざしている。すべて生けるものはひとしく自己の生命の安全と繁栄を願う。自分にとって最も愛しく大切なものは自分の生命である。自分の生命が傷つけられ殺されることほど恐ろしいことはない。われわれはこの事実を如実に直視すべきである。

「人の思いはいずこへも赴くことができる。されど、いずこに赴こうとも、自己より愛すべきものを見出すことはできない。それと同じく、他の人々にも自己はこよなく愛しい。されば、自己の愛すべきことを知る者は、他を害してはならぬ。」(相應部經典三、八、末利)

慈悲は殺さず、殺さしめない、生命尊重の實踐とならねばならない。

「すべてのものは、暴力に怯え、死を恐る。自分の身にひき比べて、殺すなかれ、殺さしめるなかれ。」(法句經二一九偈)

「すべてのものは暴力を恐れる。生こそすべてのものの愛するところ。自分の身にひき比べて、殺すなかれ、殺さしめるなかれ。」(同三〇偈)

慈悲の具体的実践法として四摂事、すなわち人々を善導・救済するための布施、愛語、利行、同事という四つの方法が説かれている。布施とは財物を与えよきこと(真理)を教えて救うこと、愛語とはやさしい言葉によって慰め励まし善導救済すること、利行とは常に相手の利益を考えて行動し救うこと、同事とは相手と同じ立場に立ち、苦楽を共にして善導救済することである。

かくて、自心浄化の道は、すべての生きとし生けるものの幸福を実現せんとする慈悲の實踐となって完成するのである。そしてそれはさらに大乘仏

教になって、一切の生けるものを救済するために、社会清浄化の道「六波羅密(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧という六つの浄に至る方法)」の実践によって、理想社会「浄土」の実現をめざす「菩薩道」へと発展していくのである。

注 本稿は抜刷をテキストとして使用する目的で書いたものである。

参考文献

- | | |
|------------------|--------|
| 「国訳一切経」 | 大東出版社 |
| 「南伝大藏経」 | 大蔵出版 |
| 世界古典文学全集「仏典」I、II | 築摩書房 |
| 世界の大思想「仏典」 | 河出書房新社 |
| 世界の名著「原始仏典」 | 中央公論社 |
| 講座「現代人の仏教」全二二巻 | 築摩書房 |
| 講座「人生と仏教」全二二巻 | 佼成出版社 |
| 講座「仏教の思想」全二二巻 | 角川書店 |
| 「中村元選集」全二〇巻 | 春秋社 |
| 「木村泰賢全集」全八巻 | 大法輪閣 |
| 岩本裕訳「仏教聖典選」全七巻 | 読売新聞社 |
| 「大乘仏典」全一五巻 | 中央公論社 |
- 岩波文庫に多数の仏典の現代語訳がある。